

文=五月女善重
(五月女総合プロダクト)

異業種経営者が集まるセミナーで「是非、お話しを」とお願いされました。テーマは何でも結構ですとおっしゃるので「なんでも」という幅の広さが、かえって僕を悩ませます。仕事の話にしても、特殊なことが多いパチンコ業界ですから興味がないのでは？などと不安に思いつつ、現場で模索していた時代の話をからめ、僕が二代目として心掛けていることなどを話すことにしました。

以前も書いたことですが、20年近く前

らくいひなつても僕たちは

のパチンコ店は顧客側も店舗側もマナーが悪く、パンチパーマの従業員が丸椅子に腰かけて脚を組み、物憂げにタバコをふかす有様でした。お客様から呼ばれても「タバコ吸い終わるまで待つてろ！」というやり取りが、どこのホールでも当たり前のように見られたのです。

お客様による「新人だめし」もありました。火のついたままの吸殻が、灰皿ごと飛んできます。パチンコ玉を投げ付けられるのは可愛いほうです。通路のすれ違

いざま、わざと肩をぶつける常連様もいました。血気盛んな従業員は売られたケンを買ってしまいますから、取っ組み合いの騒ぎもよくありました。

ただ、セミナーでこういったディープな話をして、業界が誤解を招いてもいけませんから、ごく一般的なクレーム例を少しだけ織り交ぜることにしました。

「大学を卒業してホールに立った僕は、『なんで出ないんだ』とか、『出せ』とか、理不尽なクレームを言われるワケです」

僕には切ない思い出ですから、しんみりと話していたのですが、意外なことに会場のあちこちから

「わははー!」「あははっ!」

と、笑い声が沸き起こるのです。

笑いのツボが分からぬまま、僕は二代目として奔走した話を時間内に終わらせようと、無我夢中で話し続けました。

終了後、「昔よく行っていたパチンコ屋はそんな感じだったよ」、「懐かしいなあ」と声を掛けられました。

「懐かしい?」

飛んでくる灰皿、ぶつかる肩、取っ組み合いのケンカ：字面にすると凄惨ですし、事実、過酷な面もありました。



さおとめ・よしひで

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心に現在9店舗を経営。1965年生まれ。筆者へのメッセージはホームページから<http://www.saotomesp.jp/>

しかし今から思うと、そんな中に常連様同士の触れ合いもあったでしょうし、新人だめしも「俺がココの主だ」というマナーキング行為だったのかもしれない。パチンコを接点に顧客と店舗が互角にコミュニケーションを図る、大らかな時代を象徴する側面もあったようです。

帰りがけ、ポツリと声がありました。

「息子も連れてくれば良かったよ」。

すると他の方々も「ウチのにも聞かせたかった」と口々に言い始めました。参加者の多くは創業者で、二代目に後継を託す方々だったのです。僕のつたない話の中から、二代目として伝えたい何かを感じ取ってくれたのでしょうか。

青くてもあるべきものを唐辛子

若者は青くて当たり前だが、赤く熟すると奮闘する様をみて喜ぶ芭蕉の句が、子を思う気持ちと重なって思い出されました。僕たち二代目を見守る親心に、あらためて感謝したのです。

▲